

かみさまからのおくりもの

高田小学校一年の、はぎまきちゃんは、とおくでひとりであるおばあちゃんに、おてがみをあげました。

「おばあちゃん、おたんじょうびおめでとう。おばあちゃんがとしをとるとは、ちつともしりませんでした。どうしてかというと、まだ一かいも、きいたことがありません」

ことばのおわりに、ケーキのえをかき、ロウソクに火をともしておきました。

おてがみをもらったおばあちゃんが、とてもよろこびました。なんどもなんども、よみかえし、なみだがとまりません。いまでもずっと、おぶつだんにおそなえしています。

あさ、おまいりするたんびに、おてがみをとって、ごせんぞにおれいをいいます。「こんなよい児こをさずけてくださってありがとうございます」。まきちゃんは、おばあちゃんに、このよで一ばんだいじなおくりものをしたわけです。

まきちゃんはおてがみをだすとき、お母さんによんでもらいました。お母さんは、おてがみをみつめていましたが、ないているのです。なみだをぬぐうみたい、目をこすつてから、いいました。

「ほんと、まきちゃんのいうとおりね。お母さん、おばあちゃんのおたんじょうび、ずっとわすれていたわ。ごめんね。これからは、ほかのだれよりも、おばあちゃんと、おもやのおじいちゃん、おばあちゃん、三人のことを、一ばんに思い出しようね」

まきちゃんは、とつてもうれしくなりました。おばあちゃんひとりを、だいじにおもうと、お母さんも、おもやのおじいちゃんたちもよろこぶことをしりました。ふしぎでなりません。ふつうのことをしただけなのに。

(一九八七年三月十七日)